



# なごや「聖歌」だより 4月号'10

## 「こよみ」――神の国への乗り物

教会では復活祭が近づくと婦人会の面々が集まってクリーチ(復活祭のパン菓子)を焼き、紅いタマゴを作ります。大齋が始まるころから復活祭の聖歌練習が行い、年に一度の大祭に備えます。毎年繰り返される年中行事、私たち正教徒は昔から暦に従って信仰生活をおくってきました。

もちろん使徒の時代から今のような暦があったのではなく、教会の成長とともに少しずつ付け加えられていきました。そのなかでも復活祭をはさむ『三歌経』の季節、大齋から五旬祭までは最も古い要素が残っています。

大齋期間は、かつて復活祭で洗礼を受ける啓蒙者への最終教育期間でしたが、今ではむしろ信徒に神への立ち帰りを促す期間と考えられています。

大齋中は聖書、とくに旧約聖書が読まれます。合わせて歌われるステヒラやカノンの歌詞は、聖書の内容の説き明かしとなっていますが、それ以上に聖書のできごとを自分のこととしてたたみかけてきます。たとえば神の命に背いて善悪の木の実を食べたアダムとエヴァは、神への祈りを忘れ、神へ問いかけずに自分の判断や思いに執着する自分の姿にオーバーラップされ、神からたくさんのお金を分け与えられたのに、この世の魅力に耽溺した「放蕩息子」の罪の姿が、自分のたましいの状態として何度も歌われ、神のもとへ帰れと促されます。

これからいよいよ聖枝祭、主の受難、復活へと歩みを進めます。聖枝祭、「至高きにオサンナ」と歓喜の



歌とともに主を迎えます。しかし、救いが自分の期待通りではなかったと失望し、手のひらを返したように「十字架に付けよ」と叫んだユダヤ人は私たち自身です。

「どこまでも着いていきます」と大見得を切ったのに、主が捕らえられると、「仲間だろう」と言われただけで震え上がって逃げ出すペトルの姿も私たちです。

それでも主は人を愛し、十字架の上から「この人たちの罪を赦してください」と祈り息絶えました。

金曜日晚課、私たちは主の体を十字架から下ろし、花で飾り、葬りの歌を歌い、墓に納めます。土曜日の晩課の中で静かに復活のおとずれが聞こえてきます。晩課のアリルイヤの句は「神は起き、その仇は散るべし」メロディはパスハのステヒラと同じ、期待が高まります。

暦は繰り返されます。毎年毎年暦をたどるうちに、聖書の記述が体と心の中に染み渡ってゆきます。正教会の暦や年中行事は私たちの体と心が神の国へ向かう旅がリズムよく続けられるようにと神が用意された乗り物、大きな恵みなのだと思います。

### 聖歌練習

♪名古屋：代式後の練習はお休み

復活祭へ向けての練習を毎週行いました。ずいぶん上達しました。これからも続けていきたいと思えます。特に男性の方、ご協力をよろしく。しっかりと男声に支えられないと、土台のない不安定なものになってしまいます。練習用のピアノも入りました。活用しましょう。

♪半田：4月はお休み復活祭の練習は3月31日(水)受難週祈禱後行います。

## ズナメニイ研究会 紹介

### 次回第8回

4月14日水曜日 1時30分～

先月はスモレンスキーの「パスハのステヒラ」を日本語版、スラブ語版と、ズナメニイを五線譜化したものと比較しながら5調ステヒラのメロディを味わってみました。

### 4月の指揮当番

4日 エレナ広石、ピーメン、マリア松島  
18日 ピーメン松島 25日エレナ広石

## カノン その2

カノンは早課の中程に位置します。9つ（または8つ）の歌頌は3つのグループにまとめられ、小連続と短い詩（セダレン、イパコイ、コンダクとイコス）が挿入されます。第1グループは第1、（第2）、第3歌頌まで、第2グループには第4、第5、第6歌頌、第3グループには第7、第8、第9歌頌です。第9歌頌の前には生神女の歌：「我が霊は主を崇め...（ルカ1:46-55）」（マニフィカト）が挿入され、「ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え...」という附唱（リフレイン）をつけて歌われます。

記憶される祭の大きさによりますが、各歌頌や歌頌グループの最後に、最初に歌ったイルモスをもう一度歌って一区切りとします。このイルモスは左右両聖歌隊が聖堂中央に集まって歌うため、カタワシャ（共に頌う歌）と呼ばれます。通常カタワシャはその日に指定されたカノン以外のカノンから取られません。

たとえば復活祭期では復活祭のイルモスをカタワシャとして最後に歌います。日本では大きく省略して行っているため、カタワシャとしてではなく、五旬経のイルモスの代わりに復活祭のイルモスを歌いますが、本来は、その日のカノンのイルモスとトロパリを順に歌い（読み）、最後のカノンの終結にカタワシャとして復活祭のイルモスを歌います。

その日に記憶される祭や聖人に従って、複数のカノンを組み合わせて行います。たとえば、ある日曜日に、その週の調の復活のカノンと、聖人のカノンの生神女のカノンを組み合わせるとします。復活のカノンの第1歌頌、聖人のカノンの第一歌頌、生神女のカノンの第一歌頌と言った具合に順に歌い、続けて次の歌頌も同じように行います。大斎の平日に

カノンを組み合わせる規則は特に複雑です。

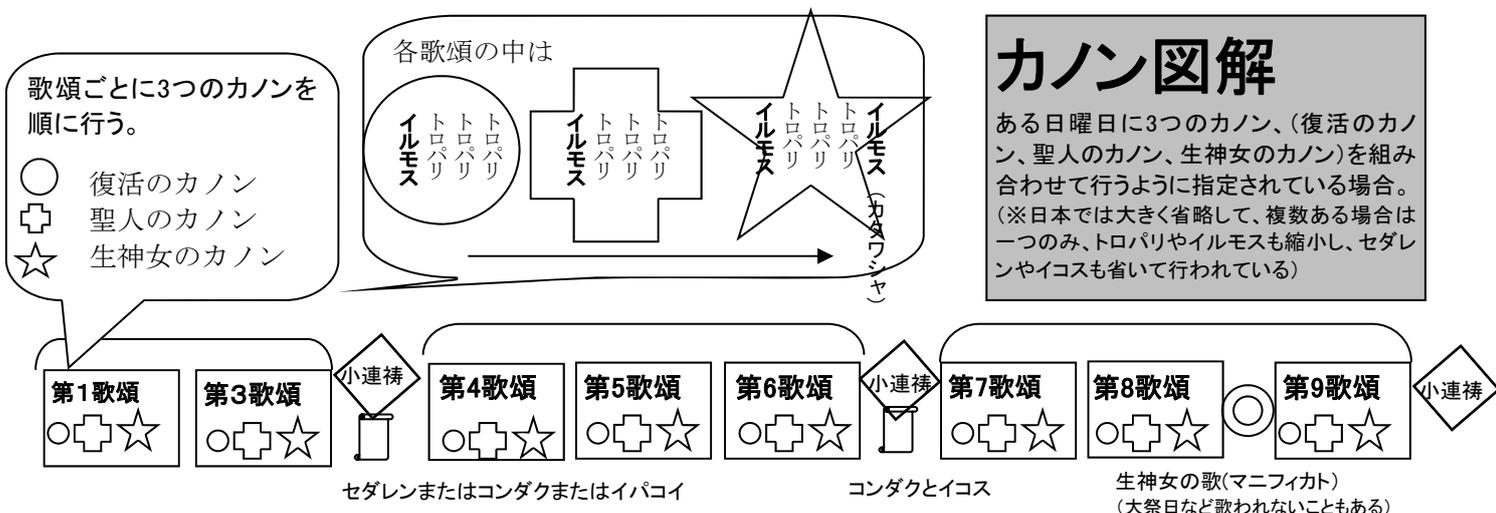
古い祈祷書や資料を調べると、もともとイルモスやトロパリは旧約歌頌の句と交互に歌われていたことがわかります。今でも大斎時には旧約歌頌と合わせて歌います（三歌斎経に「歌頌を誦文す」と表示されます）。しかし大斎以外は、おおむね旧約歌頌は歌われず代わりに短いリフレイン（エピフォン：冠詞）を加えてトロパリを読みます。冠詞は記憶される祭の内容や聖人に従って異なり、たとえば「我等の神や光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す」「克肖なる神父聖ニコライよ、我等の為に神に祈り給え」などです。最後から2番目のトロパリには「光栄は父と子と聖神に帰す」を、最後のトロパリには「今も何時も世々に、アミン」をつけます。

ギリシアではカノンのトロパリすべてが歌われますが、日本やロシアでは各歌頌のイルモスのみを歌い、他のトロパリは読むのが一般的です。復活大祭には、すべてのイルモスとトロパリが歌われます。

イルモスは「接続歌集イルモロギ（希Είρμολόγιον、露Ирмологий）」に収録されます。ギリシア語イルモロギとロシアの写本とでは編集方法が若干異なり、12～3世紀のギリシア版とロシア版を比べると、ギリシアの写本では、カノンのトロパリが各歌頌順に並んでいますが、ロシアのイルモロギは、すべてのイルモスが調（グラス）ごとに分類され、まず1調のイルモスが歌頌順に列挙され、次に2調のイルモス、3調のイルモスと続きます。

日本では「接続歌集」は明治42年に出版されており、イルモスの他に聖体礼儀の歌、讃歌とその句、旧約歌頌の句と用い方などが解説されており、聖歌者にとって有用な資料です。

イルモスのメロディはシラビック（1音節1音のシンプルなメロディ）です。



## ホームページのご案内

○ 「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。「聖歌だより」のバックナンバーもダウンロードできます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>  
詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*  
<http://www.orthodox-jp.com/liturgia> 奉神礼や聖歌の実践資料